
鎮魂歌を唄う者

鋼剣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鎮魂歌を唄う者

【Zマーク】

Z8936C

【作者名】

鋼剣

【あらすじ】

嘗て「世界一安全な国」と謳われた日本。しかし、西暦2034年の今、日本はアメリカや中国をも超越する犯罪大国に変わっています。そんな「世界一危険な国」を嘗ての「世界一安全な国」へと変えるため、警察はある非公開組織を造りだす。この話は、その組織に所属する少年とその仲間達の物語。

序章・世界一危険な国（前書き）

オリジナル長編小説初挑戦の初心者です。矛盾した内容や妙な文法があるかもしれません、そのあたりはご了承ください。

序章・世界一危険な国

西暦2034年、日本。

嘗て「世界一安全な国」と呼ばれたこの国に、昔の面影は無い。街は犯罪者で溢れかえり、1日に何件の殺傷事件が起きているのかも分からぬ。

年間犯罪件数はアメリカや中国を抜き去り、今や世界一である。各国からも「日本=世界一危険な国」とまで言われるようになってしまっていた。

しかし、日本の警察もそのような汚名を付けられて黙つてなどいない。

組織全体の強化に乗り出し、つい最近、警察の一部として非公開組織が作られ、

事件の解決速度が大幅に短縮された。最も、その組織のやり方は一部の警察官からは「非道」と言われているのだが……。

そして、今日もまた首都・東京で一つの事件に幕が下りようとしていた。

男「……はつ……はつ……」

時は9月3日の午後9時23分。

路地裏に、息を切らせながら1人の男が駆け込んできた。

この男は現在指名手配中の連続通り魔事件の犯人で、つい先程も1人の女性に

右手に持つサバイバルナイフで刺しかかつたところだ。

しかし、その女性に襲い掛かつたのがこの男の運の尽きだった。

男が襲い掛けた女性というのが、業を煮やした警察が使った圈だつたのだ。

危うく手錠を掛けられそうになつた所を逃走し、路地裏に逃げ込んだまでは

良かったものの、すでに暗くなつた路地裏で道に迷つてしまい、男は途方にくれていた。

男「くそっ・・・！さつさと逃げねえと見つかつちまう・・・」

ガチンツ

男「！？」

東京の闇夜に妙な金属音が響いた。

男は辺りを見回すも周辺には人の気配は無く、静まり返つていて。恐怖心の芽生えた男はすぐにその場から走り去ろうとした。

しかし、前方に視線を戻すといつからそこに居たのか、一人の少年が棒立ちになつて

男を見つめていた。

少年の見た目は10代後半で、服装は全身が闇夜に溶け込むような黒で統一されている。

頭髪と瞳も底なしの闇を思わせる漆黒で、その為か、顔や手の肌の色が異様なまでに白く見える。

男は一瞬驚いて数歩後退するも、そこに居るのが少年だと分かると安堵して息を吐いた。

男『なんだ・・・ただのガキかよ・・・』

そう内心で呟き、冷や汗の流れた額を右手で拭う男。

しかし、その手を下げる少年を見ると、少年は男に向かつて拳銃を構えていた。

男「なつ・・・!？」

少年「罪深き魂よ、永劫の眠りへとつけ」

少年はそつ言ひと、構えている拳銃・・・トカレフトト・33の引き金を引いた。

「ドン!」

トカレフから放たれた弾は、寸分の狂いも無く男の左胸を貫いた。男は声を発する事も無くそのまま地面に倒れこみ、しばらく痙攣した後、動かなくなつた。

少年「苦しまないよ」一発で決めてやつたんだ・・・・・ありがとうございましたよ・・・」

少年はそつ言いながらトカレフに装填してあつた残りの弾を取り出し、右胸のポケットへ

収めるのと入れ替えに「Requiem」と書かれたカードを取り出した。

そして、そのカードを動かなくなつた男の側に置き、その場を後にしてた。

翌日、この事件は新聞やニュースで報道された。

しかし、その内容は「男は警察官が威嚇で撃つた弾が当たつて死亡」となつていた。

少女「いつてきまーす」

9月4日、午前7時11分、東京某区。

一人の少女が家を出た。

彼女の名は宮美エリカ。

桜空高等学校に通う17歳の高校2年生だ。

17歳という年齢にしてはやや高い身長と大人びた体格、少し茶色味を帯びた腰まで伸びる長髪が目を引く。

顔もやや幼さが残るが、17歳にしては凛としている。

父親が警部という事もあってか正義感が強く、やや男勝りな面もある。

エリカ「アイツ、今日も遅刻してくるかな・・・」

そんな事を呟くエリカ。

今彼女の内心には、ある1人の少年が浮かんでいた。

午前7時33分、エリカは高校の昇降口に着くと真っ先に2年B組の右端の列の一番上にある下駄箱を開いた。

その中には、校内で履く上靴が一足入つており、この下駄箱の使用者がまだ登校していない事を示していた。

エリカはその場でため息をつき、己の下駄箱から上靴を取り出して

履き替え、2年B組の教室へ向かつた。

少女1「おはよー、エリカ」

少年1「よ、宮美。今学期も相羽の下駄箱調べてんのな。どうせあいつ、2学期も遅刻ばっかだと思うぜ?」

エリカが教室に向かう途中、廊下で同級生に出会つた。

かなり小柄で、制服を着ていなければ小学生と間違えてしまいそうなツインテールの少女と、彼女とは対照的に異様に背が高く、黒い髪を荒々しく立てている少年の2人である。

女子生徒はエリカの中学時代からの友人である藍沢淋あいざわ りん、男子生徒はエリカの部活仲間である早嶺龍矢はやみね りゅうやだ。

エリカ「おはよう、2人とも。1学期の最後にちょっと強めに言つたけど、結局改心しなかつたわね・・・

今のところ、2学期も全部遅刻してるし」

エリカはそう言いながら腕を組み、ため息をついた。

そんな彼女の言葉を聞いた龍矢は、少し呆れたような声で言葉を返した。

龍矢「おいおい、あの言葉のどこがちょっと強めなんだよ・・・あの時のお前の言葉、かなり荒れてたぞ?」

俺があの場面に出くわした時、お前が相羽にケンカ売つてんのかと思つたぜ」

エリカ「そう?・・・ん?・・・まあ、少し興奮してたかも・・・もしあなが止めに入つてなかつたら、あのまま

背負い投げしてたかもね」

この言葉から分かるとおり、エリカは柔道部に所属している。段位は2段で、桜空高校柔道部の2年では男子も含めて最強だ。龍矢も柔道部に所属しているが、今のところエリカとの戦績は12勝27敗2引き分けで負け越している。

淋「ええ！？ そんな事してたら、相羽君、怪我してたかもしれないんだよ！？ そうゆう事考えてたの！？」

エリカの背負い投げ発言に、淋は大声でエリカに問いかけた。そんな淋を見て、エリカは微笑しながらからかう様に言った。

エリカ「ああ、淋はアイツに『執心だつたけ。大丈夫、あなたの愛しい相羽には傷一つつけてないわよ』

淋「い、いと・・・！？ ベ、別にそんな風には思つてないよお・・・」

顔を真っ赤にしながら両腕を振り、エリカに抗議する淋。エリカは笑いながら淋の腕を掴んで彼女を落ち着かせた。しかし、そんな落ち着いた淋に龍矢がこう言った。

龍矢「でもさー、相羽つてこの組の東堂と交際してるってウワサ、聞いた事あんだけど・・・」

淋「！？」

龍矢の発言を聞いた淋は、まさに「驚愕」と言ひ言葉を体現したかのような顔をして彼の方を見た。

そして、フランフランとよろめきながら数歩後退し、その場に座り込ん

だ。

淋「え・・・?」、「嘘・・だよね・・・・?」

淋は廊下を這いつゝにして龍矢の足にしがみつき、半泣き状態で彼を見上げた。

そんな淋を見て龍矢は若干引いた。

龍矢「さ、さあ・・・・・ウワサだし、詳しい事は知らねえからなあ・・・東堂本人に聞いたらどうだ?」

少女「私に何を聞くの?」

龍矢「うおーーー?」

驚いて淋を足にしがみ付かせたまま前方に軽く跳んだ龍矢。その勢いで体重の軽い淋は龍矢の足を離れ、彼に話しかけた少女の足元に跳ばされた。

少女「何よ、その反応。私に聞きたい事があるんじゃないの?」

やや不機嫌そうな口調でその少女は龍矢に言った。

少女はウェーブのかかった金髪の長い髪に青く澄んだ瞳、エリカとほぼ同じぐらいの身長をしている。

彼女の名は東堂リリア^{とうじょうりりあ}と言い、父親がイギリス人で母親が日本人のハーフの少女だ。

生まれが日本と言つ事もあり、日本語は普通に話せ、また英語もそれなりに扱える。

龍矢「いや、聞きたい事つづーかなんづーか・・・」

龍矢は歯切れ悪くそう言った。

相羽と交際してゐるって本当か？・・・などとストレートに聞ける訳がない。

龍矢「おい、藍沢。さつさと聞けよ・・・」

淋「ええ！？早嶺君が聞いてよあ・・・」

2人とも本人から直接聞くのは気まずいらしく、互いにどちらが聞くか押し付け合いをし始めた。

そして、そういひする内に・・・。

キーンゴーンカーンゴーン・・・

リリア「あら、もう朝礼の時間みたいね」

エリカ「ほら、2人とも早く教室に行くわよ」

エリカはそう言つと、龍矢と淋を置いてさつさと教室へと向かつて歩き出した。

淋「うへ・・・・・じゃあ東堂さん、お話はまた今度と言ひ事で・・・」

「

龍矢「おい、早く行かねえと欠席扱いされるかもしけねえぞ」

龍矢はそう言つて小走りで教室へ向かい、淋もその後を追つて教室へ走つて行つた。

後に残されたリリアは軽くため息をつき、じつ呟いた。

リリア「はあ・・・レイ君も大変ね・・・」

1時限目終了後 放課中

龍矢「やつぱり1時限中には来なかつたな、相羽」

淋「そうだねえ・・・」

淋はそう言つと盛大にため息をついた。

そんな彼女を見て、エリカは不思議そうに淋に問いかけた。

エリカ「ねえ、なんで淋はあんな奴が好きなの? アイツ、仮にもクラス委員長なのに遅刻や早退ばつかで
まともに働かない、嫌な奴じやない。おかげで副委員長の私がとば
つちり受けてばかりだわ」

淋「でも、そんな不真面目な所も好きだから・・・」

淋は照れくさそうにエリカに言つた。

そんな彼女を見て龍矢とエリカは同じ事を思った。

エリカ『恋は盲田つてよく言つけど・・・』

龍矢『こつは結構重症そつだな・・・』

ガラガラ・・・

不意に教室の扉が開いた。

すると、遅刻してきた1人の少年が入室して來た。

淋「あ・・・」

黒く鈍く光る髪に吸い込まれそうな漆黒の瞳、エリカよりも高い身長に端整な顔立ち・・・。

彼がエリカ達の会話で出てきた少年、相羽怜一あいば れいじだ。

教室に入った彼はそのままゆっくつと「己の席へ向かつて歩いた。

淋「えっと、お、おはよー、相羽君・・・」

怜一「ああ・・・おはよー・・・」

淋がオドオドしながら挨拶をすると、怜一は殆ど前を向いたまま挨拶を返した。

エリカ「ちょっと待ちなさい、相羽。淋がせっかく挨拶してくれたのに何よその態度。

ちゃんと顔を見て挨拶しないよ!」

エリカは怜一の腕を掴みながら強い口調で彼に言った。

怜一はやや面倒くさそうな顔をしながらエリカに言葉を返した。

怜一「・・・別に俺は挨拶をしたいとは思ってなかつたし」

エリカ「あんたって奴は……！そんな態度だから皆があんたから離れて……」

龍矢「宮美、こいつ見てみる」

龍矢に制止され、後を振り返るエリカ。

そこには、今まで見た事の無いほどの笑顔であらぬ方向を見つめる淋の姿があった。

龍矢「藍沢はあれで良いみたいだし、ここは抑えとけて」

エリカ「でも……」

キーンゴーンカーンゴーン……

エリカが言葉を発しようとした瞬間、2時限目の開始を告げるチャイムが鳴った。

結局エリカは何も言わず、やや不満そうな顔をして席に着いた。

4時限目が終わり、昼放課に入った。

昼食を終えたエリカ達3人は、教室で朝と同じく怜一について話し始めた。

エリカ「あーもう一やつぱりアイツは嫌い！なんか嫌……！」

龍矢「何でそんなに嫌つてんだ? 別に不真面目なだけならそこまで嫌いにはならねえんじゃ・・・」

エリカ「アイツの態度が嫌なの! ちょっとは他人の心の内も考えて欲しいわね! !」

彼女は腕を組み、不機嫌そうに校庭を見た。すると、校門付近で2人の人影を見つけ、誰なのか確認しようと田を細めた。

エリカ「あれって・・・相羽と東堂?」

淋「ええ! ? 嘘でしょ! ?」

エリカの言葉を聞いて淋も窓から校門を見た。そこにはエリカの言つたとおり、怜一とリリアの姿があつた。

龍矢「へえ、じゃあウワサは本当だつたって訳か」

淋「うう・・・そんなん・・・」

淋は朝と同様に半泣き状態でその場にへたり込み、龍矢はそんな淋の頭を撫でて慰めた。

すると、不意にエリカが教室の外へと向かつて歩き出した。

龍矢「宮美? どこ行くんだ?」

エリカ「決まつてるでしょ・・・あの2人のところよ

龍矢「おいおい、何の目的での2人に会いに・・・」

エリカ「分からぬの？ 勝手に校舎を出たのよ。制裁決定」

それだけ言つと彼女は再び教室の外へと歩き出した。

龍矢「ちょ、待てつて！ 制裁つて何する気だよ！？」

淋「え・・・？ 制裁つて・・・待つてよ！ エリカ！！」

2人の言葉を聞かずに廊下に出たエリカを追い、2人も教室を出た。早足で昇降口までやつてきたエリカに、2人は再び問い合わせた。

龍矢「宮美、何も制裁なんかする事ないだろ？ 確かに勝手に校舎からではしたけど、まだ昼休み中だし
大目に見ても・・・」

エリカ「つるさいわね！！」

エリカに怒鳴られ、龍矢の全身を凄まじい恐怖が駆けた。

外の校門付近にいる怜二とリリアは未だに会話を続けている。

そんな2人を見るエリカは、鬼にも劣らぬ凄まじい形相をしていた。

エリカ「確かに、勝手に外に出ただけなら制裁なんてしないわよ・・・
・でも、もう我慢できない・・・クラス委員長でありながら、1
学期から毎日のように遅刻と早退、授業中も寝てばかり・・・絶
対に後悔させてやる・・・！」

淋「こ、怖い・・・」

龍矢『これは止められそうに無いな・・・相羽、『愁傷様・・・』

淋と龍矢がそう内心で呟くと、エリカは靴を履き替え終え、2人の方を振り向いて言った。

エリカ「・・・」今までついて来たつて事は、当然2人も来るわよねえ？』

龍矢&淋「・・・え？」

エリカ「行くわよ！さつさと靴を履き替えなさい！！」

龍矢&淋「えええええ！！？」

突然の追従命令に2人は大声を上げた。
ここでエリカについていけば、怜一とリリアに嫌な印象を持たれるのは必至。

淋は当然ついて行きたくなど無い。

龍矢も怜一とはそれなりに会話をするので、ついて行けば教室で気まずい関係になってしまつ。

龍矢「俺はちょっと・・・」

淋「私もやだよ！相羽君に嫌われたくない！！」

2人の反応を聞き、エリカは突然口調を和らげて淋に問いかけた。

エリカ「いいの？淋。このまま放つておいたら、相羽と東堂がもつと仲良くなるかもしないのよ？そうしたら、あなたが付け入る隙は確実に無くなるわ」

淋「え・・・？」

エリカ「あなたにとつて、これは相羽への制裁ではないの。これは相羽と東堂の仲を乱す為になるのよ！」

淋「本当・・・？」

エリカ「ええ！そうすれば、あなたが東堂から相羽を奪うチャンスだつていぐりでもできるわよ！」

そんな事したら逆に相羽に嫌われるだけだと思つんだが・・・龍矢はそう言おうとした。

しかし、いつの間にやら淋はエリカにうまく乗せられてついて行く気満々だ。

エリカ「さて・・・それで、早嶺はついて来るのかしら？」

淋「もちろん来てくれるよね？」

につこりと笑顔で問いかける2人。

しかし、その背後からはどす黒い殺気が溢れ「断ればお前を制裁する」とでも言つてゐるかのようだつた。

2人の頼み（脅し）を、龍矢は断れる訳が無かつた。

龍矢「お、おう・・・もちろんついて行くぜーー！」

エリカ「よし！それじゃ行くわよーー！」

エリカが威勢良く進みだし、龍矢と淋も素早く靴を履き替えて後を

追つた。

怜一「……成る程な。それが今回の指令の詳細か」

怜一「はそう言って腕を組んだ。

リリアは手に持っていた携帯電話を閉じ、胸ポケットにしまった。

リリア「ええ。集合場所はここから北東に2kmぐらい行った所にある廃工場の中よ。今回の仕事は奴らとは関係ないみたいだけど、結構危険らしいから油断しないでね」

怜一「分かってる。それで、他には誰が来るんだ?」

リリア「集合場所で分かるからって教えてくれなかつたわ。多分、いつもの3人じゃないかしら」

リリアの返答に、怜一は軽くため息をつきながら組んでいた腕を解いた。

怜一「了解。それじゃ、さああと行くとするか……」

怜一がそう言うと2人は校門を出て、道を北上した。

龍矢「おい、あの2人、外に出て行つたぞ！？」

琳「外に出て何をしに・・・？」

エリカ「く・・・こうなつたら、授業に間に合わなくなるかもしけないけど、追いかけるわよ！！」

そんな2人を見ていたエリカ達3人も、すぐさま走つて後を追い始める。

そしてこれが、この5人の少年少女たちが後に強い絆を結んでいく切欠となる。

第2章・運命（前書き）

諸事情で更新が停滞していました。
今後もしばらく更新が滞ると思いますので、ご承ください。

「ここは桜空高校の北東にある細い路地。

そこに、怜一とリリアはいた。

舗装はされているが、荒く起伏が多い上に不法投棄された「ゴミ」が周辺に点々と落ちている道を難なく走り抜ける。

一般人にはとてもできない芸当だ。

案の定、後から追いかけてきたエリカ達は、ここで怜一達に大きく離されていた。

龍矢「あいつら、よくこんな道を走れるよなあ・・・」

龍矢が誰に言つてもなく、咳くようになにそう言つた。

怜一達が軽く飛び越えた、道をふさぐように倒れた冷蔵庫に乗つて汗を拭ぐ。

淋「の、登れないよ！引つ張つて！！」

エリカ「しようがないわね・・・ほら、手につかまって」

背の低い淋は冷蔵庫に登る事ができず、エリカに引つ張られて何か登る事ができた。

そんな風にのろのろ進んでいると、怜一たち2人は既に3人の視界から消えていた。

エリカ「ううん・・・完全に見失ったわね・・・」

龍矢「なあ、もう戻るつぜ？あと10分ちょいで授業が始まると・

龍矢はそう言つて冷蔵庫を降りた。

すると、そのすぐ近くの廃工場のかべから怜一とリリアの声が聞こえてきた。

龍矢はすぐさま声の聞こえる壁に耳を当て、2人の声を聞こうとした。

エリカ「へどうしたの？ 早嶺」

龍矢「・・・相羽たちの声が聞こえる・・・」

淋「本当！？」

エリカと淋はすぐさま壁に近づき、龍矢と同じく壁に耳を当てた。すると、壁の向こう側からは確かに怜一たちの声が聞こえた。しかし、声は怜一達の物だけではなく、大人の物と思われる声も聞こえた。

エリカ「・・・大人がいる・・・？」

3人は耳を済ませてさらに会話を聞こうとした。しかし、不意に会話が途切れ、静かになつた。

龍矢「・・・会話が終わつたのか・・・？」

龍矢が小声でそう言つた瞬間だつた。

突然、凄まじい銃声と共に彼ら3人の周りの壁をくり抜くかのように無数の小さな穴が開いた。

銃声が止むと、脆くなつていた壁は3人の重みに耐え切れずに工場内部へと3人もとも倒れた。

ズウン！！

軽く砂煙を上げて壁は倒れ、3人は工場の内部へと入った。するとそこには、3人の追っていた怜一とリリア以外に黒い服に身を包んだ3人の男女の大人が居た。

その男の一人は右手にマシンガンらしき銃を持つており、この男性が壁を打ち抜いたようだ。

男性1「なんだ、ただの学生じゃないか」

マシンガンを持つている男性は、拍子抜けしたように言った。
180cm程の身長に全身黒色のスーツを着用しており、その服とは対照的に金色に染め上げられた髪が映える。

女性「まさかとは思つけど、相羽君たちの同級生？」

男性2「面倒な事をしてくれる・・・」

腕を組み、冷や汗をたらしながら怜一とリリアに問いかける女性と、顔に手を当ててうなだれる男性・・・。

2人とも先程の男性同様に黒色の衣服で身を包んでおり、女性は黒いショートヘアに藍色の鋭い瞳が目立ち、その鋭い眼光はすべてを凍らせ、見透かすかのような印象を受ける。

男性は先程のマシンガンを放った男性よりもやや小柄で、髪は茶髪。温厚そうな顔立ちで、眼鏡と髪型のためか、かなり知的な雰囲気がある。

怜一「・・・まさか」今までついて来るのはな・・・」

リリア「ちゃんと撒いたつもりだつたんだけど・・・油断したわね。
・
・

怜一「リリアはエリカ達の下へと歩み寄り、立ち上がつた彼らに話しかけた。

怜一「何故ついて来た？お前達に付けられる理由など無いと思つんだが・・・と言つより、よく俺たちについて来れたな・・・」

怜一は感心するような声でエリカ達に言つた。

リリア「レイ君へ、確かにエリカ達がついて来たのは私も驚きだけど、今はそんな事に感心してる場合じゃないでしょ～？」

リリアはいやらしげな表情で怜一の頬に己の人差し指を突き刺しながらそう言った。

怜一は冷や汗を流しながら軽く唸り、リリアの手を払つてエリカ達に再び話しかけた。

怜一「とらあえず、お前達は早く学校に戻れ。つけて来た理由は知らないが、これ以上俺たちに関わるな。それと、ここでお前達が俺たち5人を見た事は一切口に出すな。そして、ここで見た事はすべて忘れるんだ。分かつたら早く戻れ。そろそろ次の授業が始まる」

怜一は口早にそれだけいい、エリカ達から視線をそらした。

エリカ達3人の頭の中には、怜一達に聞きたい事が溢れていた。
しかし、口が開かなかつた。

目の前に居るのは、いつもと大して表情の変わらない怜一とリリア・
・だが、2人はただの高校生であるエリカ達3人でも分かる黒い
気配を帯びていた。

冷たく、温もりが感じられない、冷徹な死神のような気配を・・・。

リリア「・・・お願ひだから早く戻つて。私達はこれ以上言つ事は何も無いし、仮にあなたたちが聞きたい事があつたとしても、何も答えられないわ」

リリアがそう言つと、エリカは怜一達に背を向け、廃工場の壊れた壁から外へと向かつて歩き出した。

龍矢「お、おい、富美・・・」

エリカ「行きましょう。これ以上、彼らと関わるのは危険よ」

淋「あ、待つて！」

エリカが外に歩き出すると、龍矢と淋もその後を追つて小走りに外へと向かつた。

怜一達に聞きたい事は山ほどあった。

しかし、そのすべてをエリカは闇に葬ると決めた。

この先は知らない方が幸せだろう・・・そう思つての事である。

しかし、その決断はあまりにも遅すぎた。

もし、怜一達を追いかけていなければ・・・廃工場到達前に学校に引き返していれば、3人は後にすべてを失う事にはならなかつただらう。

男性1「…………なあ、まさかあのでかい少女……」

怜一「ええ、そのまさかですよ、ながらがみ永羅守さん」

怜一の言葉を聞き、永羅守と呼ばれた男は田を締めてため息をついた。

男の名は永羅守ながらがみわたる瓦と言い、怜一やリリアと同じ組織に所属する者で、2人の師範兼先輩だ。

女性「まさかって……どういつ事？」

男性2「おやう、先程の少女の事でしょう。最初見たときもまさかとは思いましたが……本当に富美警部の娘さんだったとは……」

そう話すのは瓦の同僚である水影冠奈みながけかんなと、彼女の義弟である水影京みながけきょうの2人。

リリア「すみません、まさかここまでついて来るなんて思わなかつたので……」「めんなさい……」

リリアは瓦たち3人に頭を下げた。

そんな彼女を見て、辰彦は苦笑しながら手を振った。

瓦「そんなに気にするなつて！あの3人も何も聞かずに帰つたし、これで良かつたんだよ」

京「でも、これで学校での関係は微妙になりそうだな……2人は、あの3人とは仲いいのかい？」

京がやや心配そうな声で2人に問いかけた。

怜一「別に。俺はなるべく他の生徒と関わらないようにしてるつもりなんで、俺のことを気にする奴はいないと思いますよ」

リリア「うーん……私は藍沢さんは何回か話した事あるなあ……まあ、他の友達と一緒にだから、とても仲が良いくて訳でもないんですけど」

冠奈「ふうん……明日学校で、もしあの3人に何かを聞かれても何も言わないでね」

冠奈が念押るように2人に言った。

2人は無言で軽く頷き、5人はこの話しが一旦切り上げた。

瓦「さて、そんじゃあ早速仕事の話に移らせてもらつぜ。今回は奴らとの関わりはないが、難易度はやや高めだから気を抜くなよ。全員、仕事の内容は分かっていると思うが、一応確認の意味で連絡しておく」

瓦はそう言つて胸のポケットから1枚の写真を取り出した。

写真には、顔中に傷跡のあるスキンヘッドの男が写っている。

瓦「こいつが今回のターゲットの男、斎藤辰彦だ。^{さいとう ときひこ}この辺りの複数の暴力団を傘下に治めており、関東近辺ではそれなりに名前が通っている」

瓦はそう言つて写真をポケットに戻し、新たに新聞の切抜きを取り出した。

瓦「5日前、東京駅内で斎藤達と他の暴力団との喧嘩が発展して銃撃戦になつた事件は覚えているな？」

怜一「確かに、一般人や駅員27名が死傷した事件でしたよね？」

怜一の言葉に瓦は軽く頷き、話を続けた。

瓦「そうだ。それで、斎藤達と争つた方の団からは出頭の呼び出しに答えて全員出て来ているんだが、斎藤達は呼び出しに来るで答えないそうだ。下手に奴らの所に行けば、また銃撃戦になる可能性も否定できない。そこで、俺たちが直々に出向き、奴を直接引きずり出すつて訳だ。今回の任務ではなるべく殺すなと言われているから、下つ端も気絶させる程度にしろ。窮地に追い込まれた場合は殺すのも仕方が無いと言われているが……まあ、このメンバーならそんな事は万に一つも無いと思つがな」

瓦はそう言つて4人を見た。

4人は何食わぬ表情で瓦を見ており、その顔からは余裕がうかがえた。

瓦「さて、そんじやそろそろ行くか？奴の拠点はここから10kmもないから、すぐに着くだろう。準備は移動時の車の中で各自済ますように。東堂と相羽は服も着替えろよ」

京「了解しました」

冠奈「オッケー オッケー」

リリア「わかりました」

怜「了解」

瓦「そう答えると、瓦は廃工場の外へと歩き出し、4人もその後をついて外へと向かった。

瓦「やつてと・・・全員、配置につけたか?」

瓦は左腕に巻いてある小型無線機に向かってそつと書いた。すると、すぐに冠奈の返事が返ってきた。

冠奈「ええ、京と東堂さんもちゃんと配置についてるわ。いつでも突入できるわよ」

瓦「よしよし、そんじや早速行くとするか。冠奈、東堂と京にも連絡頼む」

冠奈「オッケー」

瓦が冠奈の返事を聞くと、彼はビルの裏口の様子を伺つた。

最初、彼ら5人はターゲットの居るビルから少し離れた位置に車を止め、行動を開始した。

まず始めに、冠奈があらかじめ入手しておいたビルの全体図を用いて、現在の時刻からターゲットの位置を推測してパソコンに入力。

内部に入る4人にもセンサーをつけ、彼らが迷わないように導く・
・それが彼女の役目だ。

そして、リリアと京はそれぞれビルの左右で待機。

路地裏で人目につかないように潜み、冠奈の合図で窓から内部に侵入して下つ端を引きつける役だ。

たまである。

そんな瓦と怜二の二人は、リリアと京が下の端を弓を付けてしている間にターゲットに接触、身柄を確保する。

素早く行動しなければターゲットは逃げられる可能性もあるため何よりも素早い判断と行動が必要な役だ。

「冠奈、京、東堂さん、瓦から〇Ｋが出たわ。準備はいい?」

「冠奈は車の中から無線で2人にそう言つた。

京「いいですよ、義姉さん」

リリア「いつでも突入可能です」

「冠奈、オッケー、それじゃ突入よーGOーー！」

「冠奈の合図を聞き、京とリリアの2人は窓を蹴破つてビル内部へと侵入した。

リリア「ここは・・・物置かしら？」

大小様々な箱が置かれた薄暗い部屋・・・彼女が辺りを見渡しながら部屋を歩いていると、突然部屋の扉が勢いよく開いた。

男1「何だ!? 今の音はーー!」

リリア「お、来た来た・・・」

京「ハツ！」

かけ声と共に放たれた京の飛び膝蹴りが、彼に銃を向ける男の顔面に直撃した。

男は失神してそのまま床に倒れこんだ。

男2「くそ！ 拳銃持つてるくせに蹴り技ばかりだとお！? なめるのも程々にしろやーー！」

怒りに任せてナイフを振り回しながら男は京に突っ込んできた。しかし、京はその男のナイフの軌道がわかっているかのように易々と斬撃を避け、隙をついて回し蹴りを男の側頭部に食らわせた。男は勢いよく横に吹き飛ばされ、そのまま気を失った。

男3「なんだコイツ！？」

男4「人海戦術だ！多人数で一気にたたみ込め！！」

京の戦闘力に怖気づいた男達は人員を集め、多人数で京を攻撃しようと企んだ。

しかし、そんな彼らの行動を見て京はため息混じりに呟いた。

京「まつたく・・・こいつも簡単にこちらの作戦にかかってくれると
は・・・」

冠奈「そろそろね。瓦、相羽君、突入して良いわよ。ターゲットは
表向きには金融業をしてるみたいで、今は最上階の15階にある社
長室にいるはずよ」

瓦「わかった、15階の社長室だな？」

怜一「じゃ、行きますか？」

瓦「おうー。」

瓦と怜一は裏口に近づき、瓦が扉を蹴破って内部に侵入した。
リリアと京が下つ端を引き付けている効果が出ており、周囲には誰

もない。

瓦「よ～し、一気に最上階をを目指すぞーー！」

怜一「了解」

2人は裏口からすぐに見える階段を駆け上がり、15階を目指した。その途中、冠奈から連絡が入った。

冠奈「瓦、相場君、今回のターゲットについてなんだけど、彼はどんな事があつても必ず20人前後の部下を連れて行動しているらしいわ。戦闘は避けられないだろ？から注意して」

瓦「了解。そろそろか・・・」

冠奈との通信からしばらくして、2人は15階へと到着した。そして、2人は廊下に出た瞬間に我が目を疑つた。

瓦「！？」

怜一「！・・・これは・・・！」

2人が廊下に目をやると、そこには20人近い屍が倒れていた。血は天井にまで飛び散つており、激戦が起きていたのは間違いない。そして、その屍の山の中にターゲットの男を見つけた。

瓦「・・・死んでいるか・・・」

瓦が一応確認で脈を取つたが既に止まっていた。

しかし、体はまだ温かく、死んでから30分もたつていない。

瓦「……殺つた奴がまだいる可能性もあるな……」

瓦のその言葉を聞き、怜一はすぐさまトカレフを取り出し、弾を装填した。

怜一「まあ……あいつらの可能性もあり得る……」

瓦「ああ……あいつらの可能性もあり得る……」

瓦も愛用のマシンガン・・・ブルー・フレイムB-2（ドス）を構え、弾をスー^ツ内から取り出して装填した。

2人は背を合わせ、気配を殺して周りの様子を伺つた。すると、不意に社長室の扉が開いて1人の男が出てきた。

瓦は瞬時にブルー・フレイムを出てきた男に向け、苦々しげな顔をして男に話しかけた。

瓦「……やはりお前達か……マチス……」

男の名はマチス＝ヴォルタスク。

2歳近い身長に燃えるような赤い髪、そして髪よりも赤く、血を思わせるような瞳をしている。

マチスは瓦を見るとため息をついて言葉を返した。

マチス「もうここまで来るとは……予想以上に行動が早かつたな……。我々の計算だと、あと10分ほど遅れてくると踏んでいたんだが……」

ゆっくり話すマチスの言葉を他所に、瓦はせかす様にマチスに問い合わせた。

瓦「何故斎藤を殺つた？貴様らと関係は無いはずだが……？」

マチス「知らん。上から命令されて殺つただけだ。それにしても、まるで手ごたえの無い奴らだつたな。俺一人で制圧するのに30分もかからなかつたぞ」

マチスはそう言つて斎藤の死体を嘲笑しながら見た後、一団大きく息を吐いた。

マチス「さて、これで俺たちの任務は終了だ。今回はお前達と戦うつもりは無い。こんな所でお互い無駄な血を流す氣はお前も無いはずだ。さつやと戻れ」

そつやとマチスは冷一達の横を通り、屋上への階段へ姿を消した。マチスが消えてしばらくすると、屋上からヘリのローター音が聞こえてきた。

おそらく、屋上からヘリで脱出するのであるつ。後にはマチスが上つて行つた階段を見る瓦と冷一一だけが残された。

女「はい、お帰りマチス」

男「やはりお前1人で充分だつたようだな」

ビルから脱出したマチスは、ヘリの内部で2人の男と女に声をかけられた。

2人は共に黒髪で、女はポニーテールにしており、年齢はまだ二十歳にも達していないようで顔立ちもまだ幼さが残っている。男の方は逆に貫禄十分の顔で、頭髪にも僅かに白髪が交じっており、目つきもかなり鋭い。

マチス「ああ、あいつらまるで『たえが無かつたからな。伊吹も^{とうがん}嶋岩も来なくて正解だつたぞ』」

伊吹と呼ばれた女と嶋岩と呼ばれた男は、共に苦笑してマチスに言葉を返した。

伊吹「マチスに楽勝^{いふき}じゃ、私達3人で行つたら10分で全員殺せたわね」

嶋岩「まつたくだ。ここまで楽な仕事も久しぶりだな。それに、今回はうれしいオマケ付きだ・・・」

嶋岩はそう言って不気味な笑みをこぼした。

マチスと伊吹も微笑し、伊吹が3枚の写真を取り出した。

伊吹「この3人、名前や住所を調べといたよ。右から早嶺龍矢、藍沢淋、宮美エリカ・・・全員、相羽怜一と顔見知りみたい」

マチス「悪いな伊吹。それにしても、奴らを釣るいい餌がついでに見つかるとは・・・」

鳴岩「神は我等を味方しているようだな・・・・・クツクツク・・・

真昼の東京の青空に、低い不気味な鳴岩の声が響いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8936c/>

鎮魂歌を唄う者

2010年10月28日06時05分発行